様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月　６ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０１１７１

研究課題名（和文）都市と農村は収斂していくのか：研究展開の比較分析と事例研究を通じた検討

研究課題名（英文）Is there a convergence between urban areas and rural ones: Considerations from research reviews and case studies

研究代表者
梶田　真（KAJITA, Shin）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：４０３３６２５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：近年の技術的・社会的変化を反映して都市地理学／都市研究では，プラネタリー・アーバニゼーション論に代表される，都市的なものの境界横断的な浸透が議論され，農村地理学／農村研究では，農村性がますます社会的に構築されるようになり，移住者らがその形成に強くコミットするようになっていることが指摘されている．こうした研究潮流を踏まえて，盛岡都市圏で実施した事例分析では，1990年代後半以降，盛岡市に隣接する滝沢市が，農村的な性格を強調し，同市からの合併の申し出を拒否して独立市となることを選択する過程を分析した．その結果，これらの動きは滝沢村の農村性が再構築された結果として進行したものであると結論づけられる．

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は，近年の技術的・社会的変化の下での都市ー農村関係の再構築に関する学術的な議論に寄与するものであるとともに，地方創生やデジタル田園都市構想などの政策議論に対して，現代社会の文脈に則した都市と農村の共生関係の再構築に向けた指針を示すものである．

研究成果の概要（英文）：Urban geography and urban studies come to reflect recent technological and social changes and to discuss cross-bordering permeation of urbanities. On the other hand, rural geography and rural studies point out that ruralities become more and more socially constructed and that non rural natives like ex-urban migrants come to commit its formation. Based on these trends, we took a case study on Morioka urban area on the purpose of understanding changing relations between urban area and rural ones. After the late 1990s, Takizawa village, neighboring north to Morioka city, emphasize its rural characteristics and selected to be an independent city, rejecting an amalgamation offer from Morioka city. We concluded that this process is progressed as a result of socially reconstructed of the Takizawa’s rurality.

研究分野：人文地理学

キーワード：都市地理学　農村地理学　都市ー農村関係論　モビリティ　関係性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

インターネットや高速道路網，LCC の発展などにより，農村の人々にとって，フィジカルにもバーチャルにも大都市で提供される高次の財・サービス・情報の利用は身近なものとなった．他方で，二地域居住者／デュアラーに代表されるように，農村空間の利用を組み入れた都市住民のライフスタイルの出現も指摘されている．近年，顕在化している「田園回帰」の動きも上記したような環境変化の中で，農村で暮らすことがかつてのような都市的なものからの断絶を意味しなくなっていることが大きい．このような動きは時期や形態の違いはあれ，海外でも共通してみられている．

（都市的／農村的）生活様式論や 1980～90 年代の農村研究における，農村性（rurality）をめぐる議論に代表されるように，これまで都市と農村は相互排他的な地域概念として捉えられ，都市–農村関係論などを除けば，別個の研究対象として研究・議論が進められ，両者の関係に焦点があてられることは少なかった．

しかし，ヒト・モノ・カネの流動性が著しく高まった現代において，様々な形で都市と農村で共通した現象が生じていることが指摘されている．たとえば，ジェントリフィケーションは農村部でもみられる現象であることが指摘され，ICT の発展により，かつては都市でなければ享受できないような財やサービスを農村でも享受することが可能になっている．他方で，都市において新しいタイプのライフスタイルが出現し，都市と農村の両方を使い分けて生活する二地域居住者／デュアラーと呼ばれる人々も登場している．このような状況下で都市と農村を相互排他的な地域カテゴリーとして扱うことの妥当性は問い直される必要がある．もし，都市地理学と農村地理学がそれぞれに現実の動きを理解・説明しようと試みているのであれば，両者の間に何らかの議論や研究内容の収斂がみられることが予想される．

２．研究の目的

ヒト・モノ・カネの流動性が著しく高まった現代において，様々な形で都市と農村で共通した現象が生じるようになっていることが指摘されており，都市と農村の境界は不鮮明なものになっている．しかし，農村地理学／農村研究と都市地理学／都市研究の学問的交流は希薄なままであり，その結果として，双方にまたがって出現している現代社会のさまざまな現象が適切に理解されない状況が続いている．このような問題意識の下，本研究では都市と農村の概念，そして都市－農村関係を再検討し，現代の都市／農村の動きを的確に捉え，その理解を深化させることを目的としている．

３．研究の方法

本研究は大きく以下の 2 つの内容によって構成される．

第 1 に，海外および日本の都市地理学／都市研究と農村地理学／農村研究の展開を比較検討し，それぞれにおける議論や実証研究の展開，ひいては両者の間での研究・概念の相互参照がどのように変化しているのかを分析し，両者の議論に一定の共通性・収斂がみられているのかどうかを検討する.農村地理学／農村研究については，主要な学術雑誌を中心に，問題意識を共有している関係雑誌・文献を検討していく.都市地理学／都市研究については農

村において共通した現象が出現している，あるいは都市と農村にまたがって出現していることが指摘されている領域を中心に文献渉猟と検討を進めていく.あわせて，都市地理学／都市研究の中で農村概念がどのように捉えられ，その理解がどう変化しているのかについても考察する.

第 2 に，上記した研究史的・理論的な検討と連動させた形で，都市と農村の関係変化を理解するための事例研究を行い，現代社会における都市－農村関係の変化を具体的な形で検討していく. 以上の 2 つの分析の成果を踏まえて，今日的な文脈の下で都市と農村の概念，そして両者の関係はどのように理解することができるのかについて総合的な考察を行い，本研究の成果を取りまとめる.

４．研究成果

近年の都市地理学／都市研究では，全地球的な都市化（プラネタリー・アーバニゼーション）論（たとえば，Brenner 2018）に代表されるように，程度の差はあれ，地球上のありとあらゆる空間が都市化の影響下に置かれるようになっていることが議論され，地方の（望ましい）描かれ方も自然環境にめぐまれつつ，都市的なサービスや情報にアクセスできる，というものに変わっている. 国のデジタル田園都市構想はその代表的な例であるが，情報通信技術の発展によって，かつては農村では不可能であったことか，可能になったことにより，居住地選択における制約が弱まったことに加えて，「平成の大合併」によって国土の広範な地域が市となったことが背景にある. 他方で「田園回帰」などの動きも指摘されているが，それはかつてのような地理的に都市から地理的に離れ，文化的・社会的に区別される農村への単純な回帰ではない. 農村空間が選別され，そしてこうした地域に魅力を感じる都市住民／移住者が多様な形で地域にコミットするようになり，時には彼ら／彼女らの求めるような空間に作り替えられている. そもそも，就業者数をはじめ，多くの農村地域ではもはや第一産業は明瞭な基幹産業であるとはいえない. このような状況において，改めて「農村」とは何か，ということを考えていく必要がある. 具体的な，デジタル田園都市のような農村的な環境を持った都市，という考え方の背後にある社会変化や，二地域居住者／デュアラーが都市に対置する形で他方の居住地に求めるものの本質などの検討や，現代社会における農村性の社会的（再）構築の考察が求められる.

このような研究潮流の検討結果に基づく経験的な研究は，新型コロナウイルスの感染拡大による長期間の行動制約によって，当初の調査計画の大きな変更を余儀なくされたが，岩手県の県庁所在都市である盛岡市の南北に接する旧・都南村と滝沢村（現・滝沢市）の動態を分析することでこの問題へのアプローチを試みた.

旧・都南村は 1990 年代初頭に盛岡市に編入され，経済的・社会的一体化を強めていった. 合併は円滑に進み，都南村は旧・盛岡市からの旺盛な投資によって急速に都市基盤を整備し，いくつかの拠点施設が整備され，盛岡市は狭隘な市域の制約から解放され，新たな開発用地の獲得や人口規模の拡大など，北東北における都市間競争のための有力な資源を得た.

他方で，旧・都南村の編入を受けて次なる合併の検討対象となった，滝沢村の村民は盛岡市との合併に消極的であり，行政もあえて「村」でありつづけることを選択し，農村的・牧歌的なイメージをポジティブに捉えていた. 盛岡市の成長が曲がり角を迎えたことに加えて，都南村への積極な投資もあって，盛岡市の財政状況が悪化し，合併に伴うメリットを期待できなくなったことも一因である. 最終的に，滝沢村は行政サービスの拡充が可能になることを理由に単独市となることを選択したが，経済的・社会的な面における盛岡市への依存

度の高さと滝沢村が決して財政的に豊かな自治体ではなかったことを考えると，このような動きは上記したような都市―農村関係，あるいは農村の捉え方の変化の一端が反映されたものであるとように思われる．この経験的な分析結果の骨子は梶田（印刷中）にまとめている．

＜参考文献＞

梶田　真　印刷中　「1980 年代後半以降における地方圏の県庁所在都市外縁部の動態―盛岡都市圏を事例として―」地学雑誌．掲載号未定

Brenner, N. (2018) Debating planetary urbanization: For an engaged pluralism. Environment and Planning D: Society and Space 36(3): 570-590.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計2件

１．著者名 竹中克行編著・竹中克行・遠城明雄・高橋誠・水野真彦・中澤高志・川端基夫・大城直樹・武者忠彦・山崎孝史・上杉和央・山村亜希・梶田真・若林芳樹著	４．発行年 2022年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 306
３．書名 人文地理学のパースペクティブ	

１．著者名 日本地理学会編	４．発行年 2023年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 818
３．書名 地理学事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関